つなぎびと
TSUNAGI-BITO

2021年号（令和3年号）
2021年3月3日（水）
特集：スクリーニング
フリーペーパー

編集：一般社団法人「檸檬新報舎」（れもんしんぽうしゃ）　発行：大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所

神戸市が予算化　全国初

スクリーニングに約794万円

如月（きさらぎ）に一歩、動いた。全国の自治体で、初めてスクリーニングに予算が付いた。約150万人が暮らす、海と山のまち神戸市。2月17日夕、2021年度神戸市予算案の発表があり、一般会計総額およそ8700億円の中に、「教育現場におけるAI（人工知能）を活用したスクリーニング事業」が入ったのだ。予算額は約794万円。

スクリーニングは、「支援への糸口」。全ての児童・生徒を対象として、問題の未然防止のために、データに基づいて、潜在的に支援の必要な児童・生徒や家庭を適切な支援につなぐための迅速な識別を行う作業だ。

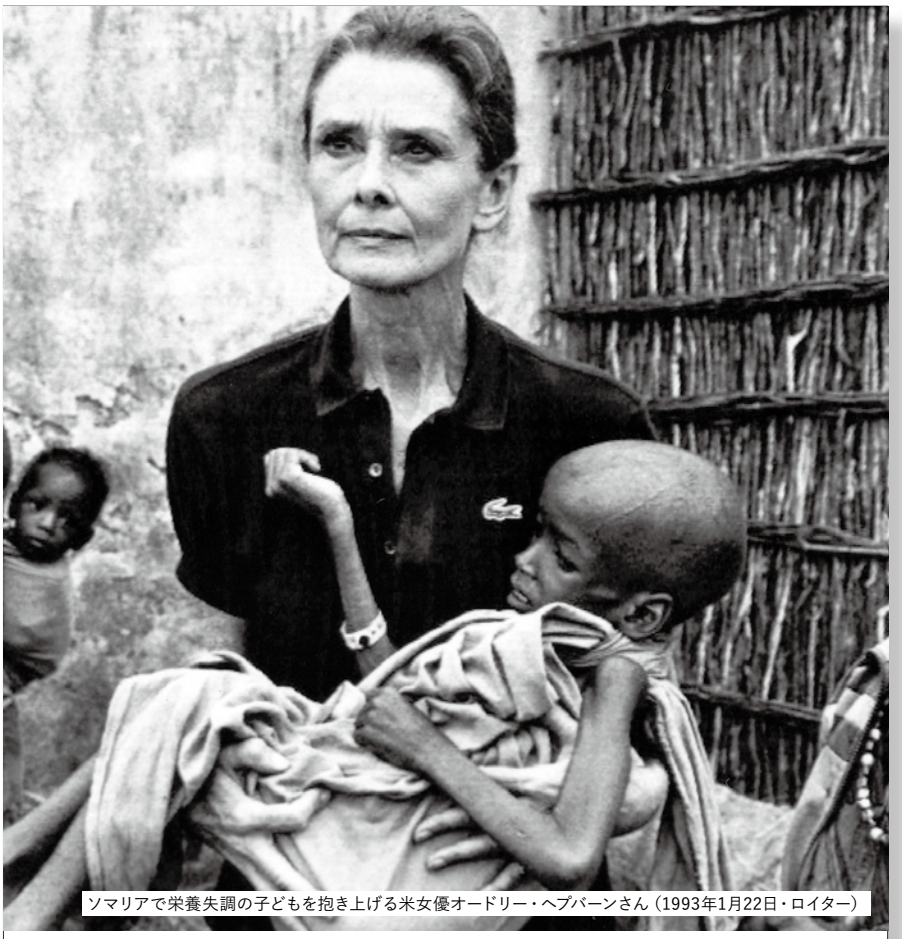
大阪府立大学スクールソーシャルワーク（SSW）評価支援研究所の山野則子教授（所長＝写真）らが2010年ごろから研究を続け、スクリーニングシートをつくって教育現場で活用してもらい、改良を重ねて普及してきた。

2021年2月中旬の時点で、全国約20の自治体の小中学校などで活用。文科省も、推奨している。

コロナ禍は、子どもたちにも容赦なく襲っている。新型コロナウイルスとの共存という新たな日常の中で、埋もれていた課題も顕在化している。

そんな状況下で、スクリーニングの予算化は、子どもたちの「崩れの兆し」をいち早く見極める「予防ワクチン」ともいえる。今後、全国の小中学校に「接種」の輪が広がることを期待したい。

2面に続く（山野教授インタビュー）



ソマリアで栄養失調の子どもを抱き上げる米女優オードリー・ヘプバーンさん（1993年1月22日・ロイター）

子どもより、大切な存在なんて、あるかしら

晩年はユニセフ（国連児童基金）国際親善大使として紛争や飢餓に苦しむ国々で活動した女優、オードリー・ヘプバーン（1929-1993）。その写真展が、全国各地で開かれてきた。

ヘプバーンは、発展途上国を何度も訪ねた。そのひとつ、バングラデシュではコロナ禍で仕事がなくなった親のために、幼い女の子が「口減らし」のために結婚させられている。ミャンマーではこの1年間、小中学校は1度も開校されていない。そこに、国軍のクーデターが追い打ちをかけた。

永遠の妖精は、どんな思いで見守っているのだろうか。ヘプバーンは、こんな言葉を残していた。〈子どもより、大切な存在なんて、あるかしら〉

（檸檬新報編集長　平田篤州）

おしらせ「つなぎびと」は、生命保険協会大阪府協会のみなさまの浄財で発行しました。

山が動いた　文科省、内閣府も

スクリーニング 飛躍の年に

大阪府立大学教授　山野則子さんに聞く

大阪府堺市中区学園町に広がる大阪府立大学中百舌鳥（なかもず）キャンパス。緑の芝生が心を和やかにし、ゆったりとした空間に学び舎が林立する。スクールソーシャルワーク（SSW）評価支援研究所は、その一角、人間社会システム科学研究科A4号棟の3階にある。所長を務める山野則子さん（地域保健学域教育福祉学類教授）を訪ねた。（平田篤州）

風雲急

――神戸市の来年（2021）度予算で、スクリーニングに約794万円が付きました。

山野　全国の自治体で、初めてです。私たちが研究・開発しているスクリーニングを、私たちと苦労しながら協働（契約）し教育現場に導入している先行自治体は、20ほどです。神戸市が予算化することで導入を明確化されましたが、それを呼び水に、さらなる広がりを期待します。同時に、よりよいものに改善していく、という責任と使命を、深く受け止めています。

――文科省も活用を推奨している。

山野　はい。昨年3月に文科省が、全国の教育委員会にスクリーニング活用ガイドを推奨するよう通知文を出し、メッセージが文科省のホームページに載りました。そして昨年5月にも、改めて2度目の推奨がなされました。コロナ禍が広がる中で、スクリーニングの活用が急がれたからです。現時点で詳しくお話しすることは控えますが、文科省が本研究室に委託して進めているSSWの常勤化調査においても、スクリーニングの有用性を示すデータが出ています。

――内閣府も動いている。

山野　内閣府では、福祉や学校の現場が持つ情報を基に支援が必要な貧困状態にある子供を見つけ、適切な支援につなげられるデータベースの構築に向けて、文部科学省や厚生労働省とも連携しながら、調査研究を開始いたします。政府のICT戦略にもそった、未来志向の活動です。

――神戸での事業の特徴、予算執行をどのようにご覧になっていますか。

山野　私たちが開発中の、AI活用のスクリーニングプログラムを実証的に活用される事業です。4月からは、従来の紙ベースではなくてWEBアプリを使った新システムに移行します。予算は、この新システムの導入、セキュリティ対策に使われるのではないでしょうか。参考として、神戸市の広報発表資料（**下記**）を、掲載します。

SSW評価支援研究所の実践、成果の相関ツリー。つなぎびとの目次にもなっている

神戸市広報資料（抜粋）

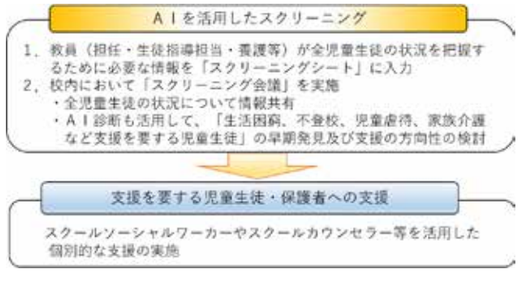
〈事業名〉すべての子どもたちの未来を応援（新規　予算額2億1900万円）

□ AIを活用したスクリーニング（794万1000円）（新規）

スクリーニングの手法及びAI（人工知能）診断を活用することで、生活困窮、不登校、児童虐待、家族介護など支援を要する児童生徒の状況把握及び支援の方向性を検討する取り組みを試行的に実施する。支援を要する児童生徒への具体的な支援は、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー等と連携を図りながら実施していく。

AI機能を含むスクリーニングシステム（YOSS）は、大阪府立大学人間社会システム科学研究科山野則子研究室が開発中のものを活用し、同大学研究室と連携して実施する。

小中学校20校程度で、毎学期にスクリーニングを実施する。



スクリーニングとは

――改めてスクリーニングについて教えてください。

山野　私自身、若いころは、現場で児童相談業務にかかわっていました。その後、大学教員として、研究者（博士）として福祉や教育の在り方を体験的に考えてきました。原点は、現場での悔しい思いです。文科省や厚労省、内閣府の仕事を通じて、さらに広く問題に向き合わせていただきました。そんな中で、学校の先生方の子どもを思う熱さは非常に高く、行き詰まり感があることは全国共通でした。生活課題は、専門性の違いからピンポイントでキャッチできず、全てを抱えざるを得ないという点、どうしたら先生方が、ピンポイントでキャッチでき、もっといきいきと教鞭をとれるのか。子どもたちにとっても見過ごされずに最善の利益が実現されるのか。1994年に、教師へのメッセージ「ひとりでかかえこまないで」をキャッチにして「子どもの相談システムを考える会」を立ち上げた時から思っていたことです。スクリーニングは、そんな流れの中で以前から提案していたツールです。

――開発に取り組まれたのはいつからですか。

山野　SSWの始まった2008年にSSWの目的として発見予防を掲げ、児童相談所との違いを明確化し、スクリーニングの言葉を提示しています。直接的な活動は、2016年に行った大阪の子どもの貧困調査から明らかに影響する項目を出して整理し、大阪府SSW・SV（スーパーバイザー）として活動する中で、先生方と試行しました。この間、研究開発の過程で気づきや改善も数多くありました。スクリーニングシートは、**Y**（山野）、**O**（大阪府立大学）、**S**（スクリーニング）、**S**（シート）の文字をとって「**YOSS**（ヨース）」と名付けられました。エクセルを使ったシートだったので、次年度に持ち越せない難点がある、といった指摘もあり、アプリを開発したのです。

予防支援

――スクリーニング導入のねらいは

山野　まずは、子どもたちの最善の利益の実現です。スクリーニングでは、すべての子どもたちを対象に教師全員で学年ごとに実施します。子どもたちは、貧困家庭の中で、貧困であるがゆえにひとりぼっち（孤立）になり、孤立する中で、いらいらする親からの虐待を受け、学校に通えなくなって学力が落ち、さらに孤立して問題行動に移っていく。コロナ禍の今、そんな負の連鎖が問題になっています。スクリーニングでは、そんな子どもたちの生活における「サイン」を多くの大人の目でチェックしていきます。

――どんなサインですか。

山野　たとえば虫歯。夏休み中に虫歯の治療をしておきましょうね、といっても9月になって治療できていない子がいる。要チェックです。これが原点です。私たちの研究室が、大阪府と大阪市などから委託を受けて2016年7月から9月にかけて行った、大阪府下の10万人を対象にした「子どもの生活実態調査」で、クリアな結果が出ています。学力や健康は、虫歯リスクを予測することで改善する。遅刻や忘れものが多いことは、実は、虐待につながる入口にあるリスクを表しているかも…。

――スクリーニングは負担になる、時間がかかるのでは、という懸念を聞きます。

山野　ポイントは、スクリーニングはアセスメントではないということです。些細な事、無自覚なことを、すばやくチェックしていく。保健所の健診時の振り分けのイメージです。さきにふれた文科省のSSW常勤化調査でも、「スクリーニングは負担にならない」ということや「スクリーニングには効果がある」という結果が出そうです。AIとWEBアプリの導入で、会議は一層、簡潔に、合理的になると思います。何より、可視化したデータに基づいて話し合うことで、「児童理解」、つまり子どもたちへの理解が深まります。

――スクリーニングの手順は。

山野　スクリーニングは、まず、学級担任や養護教諭などがYOSSに子どもの状態を記入し確認するスクリーニング会議から始まります。例えば、遅刻の回数や服装、保健室への来室、いじめアンケートへの回答などの項目ごとに、気になった頻度に応じて数値を入力していきます。この会議は、職員会議や学年会議の場で1学期に1回、30分程度で行います。できれば最初の会議には、SSWなどの福祉専門職に同席してもらうのがよいと思います。

――次に校内チーム会議ですか。

山野　そうです。それからSSWやSCらに入ってもらう校内チーム会議を行い、どんな支援をするかを決めて、実行していきます。警察署や児童相談所などにつなぐ困難なケースは約1%です。これはすでにつながっているところが多く、確認ぐらいです。そして約30%が、地域資源につなぐことや、校内で専門職も含めて見守ることによって、子どもの未来の暗転を予防できるのです。この30%の子どもたちを早期発見することが大切であり、スクリーニングによって発見出来ます。ちなみにこの30%は、就学援助率に近似し、孤立している家庭の割合にも近いと思います。

校内チーム会議。山野則子研究室「スクリーニング活用ガイド」（2019）より引用

―― Q-U（学級診断尺度）などで、子どもにアンケートを取っているので不要では、という声もあるようですが…。

山野　スクリーニングは全体的にみるものですので、Q-Uなど子どもたちに直接取っている結果も入れることができ、より結果の有効活用ができます。スクリーニングは、教師の気になる点でピックアップしているので、これらの子どもの声の結果も入れると、より正確なスクリーニングとなります。現在では、どこの学校も行っている、いじめアンケートは入っています。「その他項目」で、実施自治体の独自項目を入れることもでき、学校で活用できます。

教職員の支えにも

―「スクリーニングは先生方の業務改善も目標だ」と話されました。

山野　先生方は、年々忙しくなるばかりです。虐待を例にとっても、全国の児童相談所が対応した2019年度の虐待件数は約19万人。10年前、20年前の20倍です。「子ども家庭」に対する支援のニーズは高まる一方です。私は、国の審議会などで「クラス配置の少人数制」をずいぶん言いました。そこに、プラスして専門職が入る。そう話すと、「専門職を増やすより、教員の数を増やしてほしい」という声が出る。そうではなくて、つまり「敵対」ではなくて、先生方と専門職は「協働」の関係にある。たとえ月に1回しか来なくても、SSWは法律で定められた学校職員です（2017年4月、学校教育法施行規則で規定）。先生方の仕事の軽減を図る存在です。先生方は、すごくよく知っている、でも言いっぱなしになっているのはもったいない。拾っていくのが、福祉の仕事。そこにワーカーがいたり、カウンセラーがいたら、先生もずいぶん楽になるはずです。

―教育現場では、先生方が1人で抱え込むことが多いといわれます。

山野　先生方ひとり一人が悩みや懸念、気づきを出し合い、問題を共有できる仕組みを校内に作ることが大事です。2019年秋にフィンランドに視察に行きましたが、その時、すごいと思ったことがありました。教員は「教員の懸念」を共有する権利がある、という考え方です。日本では、懸念を共有するのは問題が明るみになってからです。日本の教員は、日々、1人で抱え込まざるを得ない。でもフィンランドでは、「悩み事は1人で抱え込まずに共有しよう。それは権利だ」というわけです。スクリーニングを学校に入れることで、校内に「懸念」を共有できる組織をつくれないかなあ、と思っています。

―先生方の受け止め方はいかがですか。

山野　受託研究の報告書から、大阪府・能勢町や和歌山県橋本市の教職員のみなさんの声を、以下に紹介します。

〈学年団で1人ずつ見つめ直して、「そういえばこの子こうやったね」と話し合いができ、1人ひとりがよく見えるようになった〉

〈ベテラン教員の経験や勘に基づいていた「なんとなく、この子しんどそう」の視点が、具体的な言葉で見える化した。「可視化」の大切さを改めて感じた〉

〈複数の視点が入ることで、学校での目に見える様子から、その向こうにある目に見えない家庭状況などへの配慮ができるようになってきた〉

〈スクリーニングシートの項目が1つの指標となり、子どものどんな様子に注目すべきなのか、若手教員にとってもわかりやすくなった〉

〈スクリーニングチェックを行うことで目立たない子どもの特徴や家庭状況、課題などが浮き出てきて1人ひとりを見ることができてよかった（20代初任）〉

〈前回と数値で比較することで、子どもの変化を客観的につかむことができた（40代、担任経験15年）〉

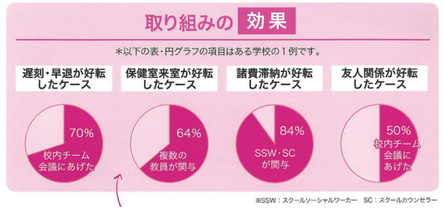
スクリーニングの効果

―スクリーニング活用ガイドが、国会でも話題になったと聞きました。

山野　能勢町の委託を受けてSSW評価支援研究所が作ったパンフレットです。その中に、「取り組みの効果」として円グラフを載せたんです（**上**）。スクリーニングの最終段階では、A教職員の関与、B地域資源の活用、C専門機関の活用の3段階の支援のうち、どれを行うかを決めます。Bをしっかり行うことで、グレーゾーンにある30%の子どもたちにも適切な支援をすることができて、効果も表れてくると思っています。2018年度に行った沖縄県の貧困調査などで、この30%の把握と対応によって、勉強する時間が増えたり、自己効力感（7面にメモ）が高まったりする子どもの姿が、よく示されました。

―実際に、効果が確認されているのですね。

山野　YOSSやケース会議を、教職員やSSW、SCらでつくった「チーム学校」で進めることによって、長期欠席児童が3分の1に減ったケースも報告されています（**下の表**）。YOSSにデータが集まっていって、3学期の長欠日数から1学期の長欠日数を引くとマイナスになる…たとえば表の6年男児だと、「2-105=−103」。「−」によって、よくなった子がすぐにわかります。「おはよう」などの声掛けも大事です。ただ「おはよう」というのではなく「あなたに言う」、目の前の「その子に言う」…これを意識してやる。小さなことを決めていって実践していくことで、効果が表れてきます。



□ 個々の長欠日数の変化（関西のある小学校）

	2016年度	2017年度
6年男児	欠席105日	→ 欠席2日
2年男児	欠席92日	→ 欠席3日
5年男児	欠席46日	→ 欠席13日
4年女児	欠席191日	→ 欠席98日
4年男児	出席26日	→ 出席48日

□ 連続7日の長欠報告書の数

2016年度…年間92枚（1か月あたり8.36枚）

↓

2017年度…年間30枚（1か月あたり2.73枚）

長欠児童が激減

スクリーニングを活用した「チーム学校」の取り組みで

AI（人工知能）、とまらぬ進化

スクリーニング　WEBアプリ、今春スタート

コロナ禍の中で、オンライン講演が増え、山野則子さんは大阪府立大学SSW評価支援研究所の会議室から出演することが多くなった。ここでは、2020年11月29日の日本子ども虐待防止学会（JaSPCAN）と2021年2月2日の国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）「社会技術研究開発センター（RISTEX）」のメディア報告会の内容を踏まえて、AIとWEBアプリにしぼって紹介する。

JaSPCAN　AI発表

AIについては、初めての発表。山野さんといっしょに開発を続けている大阪府立大学教授、中島智晴さん（知識情報システム学分野）が説明した。

「スクリーニングの結果、チーム会議にあげる必要があるか、ないか…。そこの判断を支援するAIを開発しています」

中島さんはまず、こう話した。

手法としては、YOSSに蓄積された過去のスクリーニングデータを使って、その傾向を把握できるAIを作る。そのAIが、児童生徒に関する新しいデータの入力を見て、チーム会議が必要かどうかをAI的に判断する。中には、かたよったデータもあるので、修正をかけていく。そんな手順で日々、開発中だという。

大阪府立大学は、全国約20の自治体と5年間の契約で、YOSSのデータの集積を重ね、AIに学習させている。

後日、山野さんは言った。

「契約した自治体のみなさんから、データを送っていただき、あと3年間、AIに『食べさせて』いくわけです」。進化し続けるAI…それを「食べさせる」と表現したところが、わかりやすく、印象的だった。

RISTEX メディア報告会

RISTEXは、社会問題の解決などを通して、新たな社会的・公共的価値を創出するための研究開発を推進している。山野さんは2014年9月から3年間、助成を受けて、「エビデンスに基づくスクールソーシャルワーク事業モデルの社会実装」を実践。その一つのGOAL（ゴール）として、この日、「スクリーニングシステム（YOSS）AI開発へ」のテーマで報告した。

AIの話の前に、コロナの影響調査を厚労省から依頼された厚労科研特別研究で調査中（2021年3月発表予定）の立場から、コロナによる貧困や孤立が一層、見えなくなっていることに言及した。

「だれとも話ができずに一人で子育てをしている親が、増えている。私は2005年から、育児と虐待の関係について発言してきました。すべての世帯で孤立している恐れは3分の1あり、そこが虐待に移行するリスクを、データーで示しています」

そんな貧困や孤立から派生する子どもたちの課題に気づき、予防していくツールがYOSSだとして、アプリ開発にふれた。

まず、RISTEXの助成によって実装しているSSW事業プログラムの遂行にあたって、スクリーニングをけん引する人材が必要とした。そして、アプリを活用すると、「SSWや教育委員会が、自分のどこが足りないのか、自治体として何が足りないのか。ワーカーが動いたときに不登校はどう改善するのか、などを相関図で見られます。学期ごとのデータの推移も、チェックできます」と話した。

AIについては、中島智晴教授の説明を踏まえ、上図で、「AI技術を用いることの優位性」を示した。

読者のみなさまへ

スクリーニングガイドについては、文科省のホームページにも紹介されています。ご活用ください。AIとWEBアプリを活用できるように進化したスクリーニングは、これまでの研究と実践のGOAL（ゴール）であると同時に、新たなSTART（スタート）だと考えています。子どもたちの笑顔こそ、未来を拓く光です。スクリーニングの輪が、全国の小中学校にくまなく広がるまで、スクリーニングの歩みは続きます。変わらぬご協力とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

大阪府立大学
スクールソーシャルワーク評価支援研究所

スクリーニングの魅力 じわり全国へ

神戸市が予算を付けた教育現場でのスクリーニング事業。大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所のチャレンジングな取り組みで、日本列島にじわりと広がっている。ここからは、山口県萩市、大阪府豊能郡能勢町、和歌山県橋本市の事例をみながらスクリーニングの魅力を探る。（「つなぎびと」取材班）

山口県萩市

新規不登校、未然防止へ

幕末に若き吉田松陰（1830-1859）が教鞭をとり、桂小五郎（1833-1877）や高杉晋作（1839-1867）が学んだ長州藩の藩校「明倫館」。その向かいに建つ萩市総合福祉センターで、山野則子さんがマイクを握っていた。

2020年11月24日の昼下がり。講演のタイトルは「新規不登校の未然防止（スクリーニングの提案）について」。小中学校の先生、SSW、保健師ら約40人と、オンラインでの参加者が聞き入った。

保健師との連携は強み

約4万4000人が暮らす日本海に面した萩市。全校児童が30人から50人の学校が7割という、小規模校が多いまちだ。

萩市の不登校児童・生徒は、2017（平成29）年度に比べて2018（平成30）年度は倍増して、2019（平成31/令和元）年度も増えた。

「新たな不登校をなくしたい」。そんな主催者（萩市教育委員会）の思いから山野さんが招聘され、前年8月に続く2度目の講演となった。

「萩市の教育委員会さんは、保健師さんとリンクしている。保健師さんと近い。それが強い、（スクリーニングも）伝わりやすいと思います」

こう切り出した山野さんは、スクリーニングは保健師が普通に行っている業務と通じている、その学校版でもある、としたうえで、めざすのは、「子どもの最善の利益の実現であり、先生方の業務の改善です。先生がいきいきしていなければ、子どもたちにも影響が出ます」と前置きした。そして、**2、3、4面**で紹介した山野さんの思いを、35分間でコンパクトに伝えた。

グループワークをする教職員（萩市総合福祉センター）

情報共有の仕組みを

強調したのが、学校に「些細な懸念」「情報共有」の仕組みがないことへの問題提起だった。

山野さんは、2015年2月に神奈川県川崎市で起きた事件を例に出した。当時13歳の中学1年の男子生徒が、多摩川河川敷で18歳と17歳の少年3人に暴行を受けて絶命した事件だ。

松下村塾（左）、吉田松陰の肖像画（上）、碑文（下）

男子生徒は、地方から小学6年の時に川崎市に転入。中学1年の2014年12月ごろ、18歳の少年と知り合い、翌2015年1月から学校に姿を見せなくなった。

「校長と担任は、男子生徒は不登校になったと思い、『不登校』として対応していました。実は、母子家庭で貧困状態にあり、地域担当の先生は、民生委員や公民館の人からいろいろ情報が入る。さらに、生徒指導の先生は、問題行動などについて警察と連携する学警連絡会で情報が入る、そんな可能性がよみとれます。子どもの実相は、トータルに見ない限り、見落としてしまいます。学校の中に、情報を横串で共有できる仕組みが必要なのです」

チーム学校で対応を

もう1つ強調したのが、違う視点でアプローチできるSSWやSCとの連携、チーム学校の構築だった。

「気になる、大丈夫かな、と思っても、今の学校では言っていくところがない。教職員みんなが意識して、知恵を集めて、そこにSSWやSCが入る。SSWやSCは、赤信号をチェックし、黄信号を拾って、次の案を考えないといけない。SSWやSCが入ることで、問題行動の低減や親からのクレーム対応などはずいぶんサポートできます。先生方は、かなり楽になると思います。先生が1人で抱え込むのではなくて、みんなですべての子どもたちを見ていくことが、スクリーニングの基本です」

YOSSへの記入について質疑する参加者たち（萩市総合福祉センター）

家庭の貧困の実態がわかれば、「就学援助が使えるんじゃない」と、みんなで検討して福祉の窓口につなぐ。それが、不登校の改善につながっていく。

「お金と不登校はつながります。就学援助を受けると、学校に来ることができる子どもたちが出てきます」

この日のテーマの「新規不登校の未然防止」にも、かかわる話だ。

直球ではないけれど…

山野さんは言った。

「些細な事、遅刻や忘れ物、歯磨きなどスクリーニングのチェック項目が、リスクを予測するサインになっています。貧困→虐待→不登校→学力低下→非行→貧困…このサイクルを断ち切るために、個人の自己満足ではなく、みんなが共有できるツールとしてスクリーニングシート（YOSS=ヨース）を使っていただければと思います」

そして、こう話した。

「『つなげる見方』をしていくのが、スクリーニングです。気づきを導く些細な一声が生まれます。地域の資源を使うことは、とても大切です。地域の資源は、だれが使っても構いません。たとえば子ども食堂。先生は、子どもの名前を伝えなくても大丈夫です。子どもの背中を後押しするだけです。だから、個人情報の問題はありません。直球ではないけれど、愛される、大事にされる経験をする、普通に愛してくれる場所に行くこと。それが、その子の自己効力感（メモ）を高めます。おうちで、テレビとにらめっこだけ…これが、貧困家庭の子どもの姿です」

吉田松陰らが学究に励んだ明倫館

メモ　自己効力感

ある状況において必要な行動をうまく遂行できると、自分の可能性を認知していること。つまり、これからやることに対して「それは自分にできそうだ」と思えること。自己効力感を高めると、勉強や仕事の効率があがり、挑戦する気持ちやモチベーションもアップ、困難を乗り越えやすくなる。

実践校からの報告
「焦点が絞れた」

山野さんの2度目の講演は、実は2020年春の予定だったがコロナ禍でこの日に延びた。萩市では2019年度からのスクリーニング導入を決めており、春の講演は延びたものの、7校が導入した。

講演の後、すでに導入した学校の先生から、良かった点と今後の課題について、実践報告があった。

全校児童数が56人の小学校の女性教員は、「気になるという度合いを数値化することによって、気になる子の困難の多さに気づくことができた、気になると感じていなかった子の困難さにも気づくことができた」と話した。

今後の課題として、「気になる、の判断基準があいまい。甘くなってしまう教員と厳しい教員がいる。気になる児童について、週に1回は情報交換しており、数値の修正はできるのですが…」と話した。

別の小学校の女性教員は「今年初めて生徒指導の担当になった。右も左もわからない中で、どんな視点で児童の様子を把握していけばいいのかが、よくわかり良かった。12月にいじめ対策会議があるが、そこにはSCだけでなく、SSWにも入っていただいてYOSSを活用していきたい」と報告した。

「独自の工夫で活用を」

山野さんがこたえた。

「判断材料、判断基準は、一応、YOSSに書いてありますが、『うちの学校はこれをみよう』『気になる、とはどれぐらい気になるとするか』などを検討し、『自分の学校はこうするよ』という独自の基準をつくって、ワードでノートにして利用している学校もあります」

そして、「基準づくりを話していくことで、視点が一緒になっていく、ひざを交えて決める、それ自体がよかった、という声もきいています」と話した。

「子どもの幸せにつながるツール」

萩市教委学校教育課

宇田川浩樹 課長の話

「萩市ではかなりのスピードで児童・生徒数が減っているのに、不登校児童・生徒数が増えているのは、大きな課題だと受け止めています。昨年（2019年）、山野先生のお話を聞いて、『未然防止』を念頭に取り組んでいきたいと思い、5年契約でご指導をあおぐことになりました。5年後には、小学校だけで約500人の子どもたちが減っていきます。少ない萩の一人一人の宝の子どもたちが、各学校の優れた教育的な活動をしっかり受けられるように、そして成長できるように…その1つの手立てとして、スクリーニングに取り組んでいただけたらと思います。5年たつと、教職員の層もがらっと変わります。生徒指導上、経験を持たれた先生方が現場にいなくなる、とひしひしと感じています。このようなツール（YOSS）を使って、先生方みんなの資質をあげていくことが、子どもの幸せにも繋がっていくのではないか、と教育委員会では考えています」

大阪府豊能郡能勢町

福祉と教育の「突合版スクリーニング」で活路

氷点下は珍しくない「おおさかのてっぺん」大阪府豊能郡能勢町。人口約1万人のまちが、福祉版と学校版スクリーニングの双方を合わせた「突合版スクリーニング」を進めている。福祉版によって乳幼児期から学齢期までをフォローし、学校版との突合で「18歳までの切れ目ない支援」を実現する。そして、不登校などを未然に防ぐ「予防的支援」にもつなげる試みだ。（平田篤州）

「能勢町は、スクリーニングの先進地。しっかりと、自分たちのものにされている。私のほうが、勉強させてもらっています」

大阪府立大学教授の山野則子さんは、こう話した。事実、今年1月25日には能勢町に出向いて、学校版スクリーニングを参観してきたという。

山野さんと能勢町の接点は、2018年度にさかのぼる。スクリーニングについて調査研究業務を委託され、制度設計を進めた。2019年秋の時点で、学校がスクリーニングシート（YOSS）への入力、校内チーム会議まで実施。福祉版スクリーニングについては、入力作業までこぎつけた。

2019年10月1日、能勢町保健福祉センターで行われた能勢町地域福祉計画推進委員会の議事録には、次のような説明が見える。

〈学校版スクリーニングは、全児童を対象に教職員が実施します…福祉版は、お母さまが妊娠しておられる時から学齢期、支援の対象年齢までに「子どもの未来応援センター」の多職種の担当者が評価をし…切れ目のない支援を行うものです。突合版スクリーニングは、学校版と福祉版を突合させることにより…支援の検討を行います〉

こうした流れの中で生まれたのが、国会でも取り上げられた「スクリーニング活用ガイド」（右）だ。「能勢町子どもの貧困対策強化促進事業」に係る委託業務として山野さんらが作成した。

「支援の見える化・児童生徒理解のために」という副題がついている。

ここでは、福祉版スクリーニングについてみる。

乳幼児から学齢期までの「切れ目ない支援」

能勢町での手順は、こうだ。

対象は、まちの全ての0歳から18歳未満までの約900人。保健師が、乳幼児健診などで気になる事例を洗い出す。福祉職員が、児童クラブ（学童保育）への申し込みや幼稚園、福祉制度の利用状況などを精査する。その結果を、それぞれ「健診に来たか」「地域の行事への参加は」など10-20のチェック項目が並ぶスクリーニングシート（YOSS）に入力する。

入力作業は、能勢町健康福祉部・子どもの未来応援センターのスタッフが担当する。気になることは、備考欄に記入する。

次に、応援センターや福祉部局、地域人材で構成する家庭教育支援チームのリーダーら4､5人が集まって､「スクリーニング会議」を実施。シートを分析しながら「高リスク」や「注意が必要」などと、ひとり一人の子どもについて、支援の必要性の度合いを確認する。

そして、最終的に「子どもの未来応援センター担当者連絡会議」を開き、スクールソーシャルワーカーらも入った8、9人のメンバーで協議。支援プランを決めて役割分担し、地域資源にもつなげて支援していく。

コロナ禍の中、小学6年生にしぼって「突合」

「スクリーニング活用ガイド」を作り、さあ、これからという2020年早春、コロナ禍に襲われた。思うように進まない日々が続いたが、一歩一歩、前進した。

「昨年秋、福祉版と学校版の突合を小学6年生（約40人）にしぼって行うことになり、進めています」

2021年2月中旬、未来応援センターの藤原詩穂美さん（社会福祉士）は、こう話した。

山野さんは、言った。

「何度も繰り返しますが、警察署や児童相談所につなぐ困難なケースは約1%。予防できるケースは、約30%あります。私は常々、この30%はピックアップできる、といっています。でも、熱心な自治体でも7%ぐらい。ところが能勢町は、37．7%です。校内チーム会議での対応事例で、遅刻や早退が改善した率（好転率）も70%になっている。熱心な自治体でも好転率は10%ぐらいですから、能勢町のすばらしさが際立ちます」

スーパーバイザーの山野さんに、「教える立場が逆転した」と言わしめるほどの能勢町の取り組み。「おおさかのてっぺん」だけでなく、「YOSSの頂上」をめざす、確かな歩みになっている。

和歌山県橋本市

スタートマニュアルと活用ビデオ作成

スクールソーシャルワーカー（SSW）のいる会議風景（スクリーニング活用ビデオより）

和歌山県橋本市は、人口約6万2000人。市街地に紀ノ川が流れ、高野山を仰ぐ自然豊かなまちだ。市歌の3番には、「とわに作る　福祉の楽土…希望の未来われら洋々」とある。

そんな「福祉の楽土」への想いの中から2017年4月、健康福祉部に子育て世代包括支援センター（愛称・ハートブリッジ）が開設された。

教育と福祉の連携を推進し、関係機関との連携を密に、妊娠期から18歳までの切れ目のないきめ細やかな支援を進めることが目的だ。

1年目の2017年度は、小中学生に関わる相談が大半を占めた。学校への行き渋りや親子関係のしんどさなどに対応して、問題行動の改善につながった。

ラベルのデザインは橋本市職員が手作りした。

2年目に入った2018年4月には、さらに学校との連携を強化するため、「教育関係嘱託職員」の立場で、SSWを配置。山野さんがスーパーバイザーとなり、毎学期のように橋本市を訪れ、「教育と福祉の連携」を進めた。

そして、ハートブリッジからの委託で2020年3月、スクリーニングスタートマニュアルとスクリーニング活用ビデオを作製した。ビデオの最初には、次のようなテロップが流れる。

〈教職員や専門性を持つ人材が連携しながら複雑で多様な課題を抱えた子どもたちをチームで見守る体制をチーム学校と呼んでいます〉

〈しかし、実際には学校の中で情報や対応を組織的に共有する仕組みが法定化されていません〉

〈一方海外では「教師には共有する権利がある」として教師が一人で悩まないような仕組みが存在します〉

〈日本の現状では、教師が個人の判断で気になった子どもを支援していることが多く、多忙な日常の中で教師同士が十分な相談もできないまま個人で問題を抱え込みやすい状況にあります〉

〈また、就学前には保健部門によって定期的にすべての子どもの機能面、心理面、健康面、家庭状況など多面的な把握がなされていますが、就学後はすべての子どもを定期的に把握する仕組みはありません〉

〈つまり、複数人の教師で全員の子どもについて検討し合い課題のある子どもを拾い上げるという仕組みはなく、これらの現状は結果的に子どもがリスク状態になったり教師を苦しめたりする可能性があります〉

そして、下のような画面が現れる。画面には、こう書いてある。

客観的なデータ+複数人による多角的な議論
２つのことが重要！

橋本市も、今春からウェブアプリを使った新しいシステムで、スクリーニングを行っていくことになる。

大阪府泉大津市

全小中学校で導入

そして、2020年、大阪府の泉大津市が地道に1年かけて取り組み、全小中学校でのスクリーニング導入に成功した。切れ目ない支援の輪が、じわりと広がっている。

NHKテレビ 総合/関西熱視線　Eテレ/ハートネットTV

コロナ禍の今、子どもたちは

コロナ禍の中で、「見えない貧困」が広がっている。子どもたちの「教育の格差」も、浮き彫りになっている。山野則子さんは、NHK 総合 / 関西熱視線（写真㊦）や NHK 教育テレビ（E テレ）/ ハートネット TV に相次いで出演した。

瀬戸際のシングルマザー

2020 年 10 月 9 日夜の関西熱視線。感染拡大から半年で解雇や雇い止めが全国で 6 万人を超え、収入の低い人ほど打撃を受けていると紹介された。

沖縄県の調査だが、番組では「関西でもあてはまるのではないか」としたうえで、「収入が半減した世帯の割合は、年収 600 万円以上の世帯で 5.0% だったのに 200 万円―400 万円未満では 16.4%、200 万円未満では 30.6% にのぼっている」ことがと示された。

番組では、2 人の子どもを育てている保険営業の母親を取材。月 25 万円だった給料が、コロナ禍による経営への影響で、7 月には 10 万円に減った。ある日の晩御飯は、2 人の子どもと 3 人分で 690 円。食費を切りつめても、月収のすべてが生活費に消えていく、「瀬戸際の生活」を浮き彫りにした。

「だれのせいでもない。飛び降りてしまおうか、と思ったときに、子どもが『ママの笑っている顔が大好きだよ』と言ってくれて…。離婚する前から支えてくれた、子どもたちの幸せが、私の幸せ。子どもたちのために、どんなにしんどい仕事でもやっていこうと思っています」（母親の言葉）

山野さんは、「非正規雇用など、就労状況が安定していないところが、最初にカットされている。もともとしんどかった世帯に、しわよせがいっている」とし、「しんどくても声を上げにくい、自己責任論の社会の空気がある。大阪の生活実態調査でも、就学援助が受けられるのに、受けていない家庭が約 15% もあった。援助を受けることが恥ずかしいと思わなくてもすむ社会、スティグマ（レッテル張り）のない社会を国、行政も含めて、みんなでつくっていかないといけない」と話した。

番組は、〈頑張っていても、苦しいときは、声をあげてもいいんだよ〉というメッセージを印象付けた。

学びの機会を保障するために

2021 年 2 月 2 日夜のハートネット TV。コロナ禍で学びの機会を奪われている子どもたちに焦点を当てた番組だった。

山野さんは「支援が必要な人は、声をあげられない。モチベーションを作るところから支援」と話した。後日、支援者から「『モチベーションを作るところから支援が必要』との先生のコメントに強く勇気づけられました」とのメールが寄せられた。

そして翌 2 月 3 日夜のハートネット TV で、子どもたちの声が紹介された。

家計の減収で、高校や大学への進学が「贅沢な」選択肢となり、家族に相談できない。まずは受験料が必要。オンラインは便利な一面、誤解や孤独を加速させてしまう危険性も、はらんでいる…そんな子どもたちの悩みや不安が伝わってきた。

〈子どもたちの声〉

■母と妹の 3 人暮らしの女子中学生

「高校受験が目前。最初の勉強のつまずきは去年の緊急事態宣言。学校から大量の課題をただ渡されて、分からないところがあっても放置。経済的に塾へ行く余裕はない。母は生活を支えることと、知的障害のある妹の世話で手一杯。学校の先生も忙しそうだから、勉強で分からないところを聞く人がいない」

■中学 1 年の女子

「兄は重い喘息。コロナにかかったら悪化してしまうので、私も自主休校している。テストが受けられず、成績はつかなかった。高校に行けるか分からず、不安だ」

■小学 1 年の男子

「友達の前で咳が出たら嫌だなと思われちゃうから、学校に行ってない。友達と一緒に外で遊びたい。宿題みんなで一緒にやりたい。まだ使ったことないランドセルを早く背負いたい。授業どうやって受けるのか気になる」

■高校 3 年の男子

「重度の心臓病がある。3 大学に別会場での受験を打診したが、受け入れられなかった。命の危険を伴うので今年の大学受験を断念。悔しい」

■小学 2 年女子

「おととしお父さんが病死。生活のため、お母さんは昼夜で看護の仕事をかけ持ちしている。お母さんと一緒に過ごす時間が減った。ずっと仕事をしているから、1 人ご飯食になり、つまらない。遊んだりしてくれないから、つまらない」

■高校 1 年の女子

「4 月に入学したが、すぐに登校できず、新入生同士はまず SNS で仲良くなった。でも学校が再開すると関係がきしみ始めた。ハブり（仲間外れ）みたいになって。自分も悪口を言われはじめ、居場所がなくなり、学校をやめた。家にいると、SNS しかすることがなくなっちゃう」

情報誌「ウェルおおさか」

大阪市こどもサポートネット特集

「貧困」は恥ずかしいことではない

山野さんは、大阪市こどもの貧困対策推進本部（本部長、松井一郎市長）会議にも出席して、「大阪市こどもサポートネット事業」（メモ）についても、提言している。事業について、2020 年 12 月 22 日に、情報誌「ウェルおおさか」を発行している大阪市社会福祉研修・情報センターの取材を受け、2021 年 2 月号に掲載された。記事は、「貧困と恥の文化」についての発言で締めくくられていた。引用する。

〈貧困とは「キャピタル（所得や資産などの経済的資産）の欠如」「ヒューマンキャピタル（健康や教育などの人的資本）の欠如」「ソーシャルキャピタル（つながりやネットワークなどの社会関係の資本）の欠如」の 3 つが重なっている状態だと考えられています。

例えば、生活困窮で自転車を持っていない子は、自転車で遠出に誘われても黙って参加せず、（その時点で）ソーシャルキャピタルが欠如し、やがて不登校になった場合、ヒューマンキャピタルも欠如しています。

しかし、この子が恥ずかしいと思わずに「うちに自転車がない」と普通に言うことができたら、友だちが「自転車貸すよ」と言ってくれるかもしれず、その子の人生さえ変わってくるかもしれないのです。

私たち大人は、「貧困＝恥」という偏見をなくし、ありのままの自分が出せる社会、温かい声をかけあえる社会をつくることに力を注ぎ、子どもたちを貧困から守っていきたいものです〉

メモ　大阪市こどもサポートネット

課題を抱える子どもや家庭を、学校や区役所、地域が連携して支える事業。2020 年 4 月から全区でスタート。教育と福祉の連携や子ども食堂など地域資源の活用を進めている。

SSW の不朽の教科書

「スクールソーシャルワーク ハンドブック」発刊

編著者ら招きオンラインシンポ今春開催

厳しい社会状況が続くなか、SSW の“不朽の教科書”と呼ばれる『スクールソーシャルワーク ハンドブック：実践・政策・研究』（明石書店）が発刊された。米国の SSW 研究者が編著を担当し、大阪府立大学人間社会システム科学研究科の山野則子教授が監修。600 ページを超える実践的な内容となっている。3 月 14 日には発刊を記念し、原著者らを招いて、アメリカとオンラインで結んだ出版記念シンポジウムが開かれる。

（文／写真　今西富幸）

「SSW に関わるすべてを網羅したと言っても過言ではない。ソーシャルワークの実践や教育に欠かせない内容で実践家、研究者、学生にとって間違いなく必読書になるはず」

本書のあとがきで、山野教授はこう語っている。

約 40 年前、SSW 研究の国際的な先駆者といわれる米ロヨラ大学のロバート・コンスタブル名誉教授が初版の編集を手がけて以来、改訂を重ねてきた。SSW 業界のバイブルとされ、8 版目となる。

今回は研究者や現場のワーカーら新たな 22 人を含む 46 人が執筆を担当。全 7 部で構成され、SSW の歴史と全体像をはじめ、政策的背景やアセスメントと実践に基づく研究、各段階に応じた SSW の介入方法などを丁寧に解説している。

米国は SSW の先進国だ。1900 年代初頭に貧困地区の社会事業として始まり、70 年代から活動が本格化する。なかでもシカゴ市があるイリノイ州は約 3000 人の SSW が活動し、州内のイリノイ大学やロヨラ大学で研究が進められてきた。研究者の一人、ロヨラ大学のマイケル・S・ケリー教授（写真㊤）は本書の編著を担当し、近年 SSW を対象にした全米調査も進めている。

一方、日本の SSW の歴史はまだ浅い。文部科学省が 2008 年度から「SSW 活用事業」として導入したのが最初だが、全国的な事業化が行われる前から先駆的な取り組みを進めてきたのが山野教授の研究室だ。大阪府と協同し、07 年に「スクールソーシャルワーク研究会」を設立。09 年には大学内に全国初の SSW 養成課程を設置した。また、日本社会福祉士養成校協会（現・日本ソーシャルワーク教育学校連盟）と連携し、SSW 教育課程カリキュラムもつくった。

さらに、本書のもう一人の編著者である米インディアナ大学のキャロル・リッペイ・マサット教授（写真㊦）らを招いてシンポジウムを開催し、SSW の啓発活動にも力を注いでいる。

定　　価　20,000円（税別）
問い合わせ　明石書店
TEL 03-5818-1171

つなぎびと
TSUNAGI-BITO

発 行：大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所
住　所：〒599-8531　大阪府堺市中区学園町１－１
電　話：072-254-9783（山野則子研究室）
メール：eb-ssw@sw.osakafu-u.ac.jp
編 集：一般社団法人「檸檬新報舎」
住 所：〒541-0046　大阪市中央区平野町２丁目２番９号 ビル皿井 701
電 話：06-6226-5596
印 刷：株式会社 日章印刷所　電 話：06-6306-0481
「つなぎびと」題字　松田 勤 ／ DTP　丸井春・穴地 奈津子

つなぎびとは、生命保険協会大阪府協会のみなさまの浄財で発行しています。矢野浩一会長から、メッセージをいただきました。

子どもたちの元気な姿を見ていたい

一般社団法人生命保険協会大阪府協会 会長　矢野 浩一

盲導犬を寄贈する矢野会長（中央）と前田孝一事務局長（右端）

はじめに

生命保険協会大阪府協会は、大阪府に事務所がある生命保険会社 24 社で成り立っています。協会では、毎年 9 月に大阪府下福祉施設等支援募金活動を行っており、61 回目の今年も約 2 万人の皆さんから募金を集めることが出来ました。コロナ禍で仕事が制約されている中で、会員会社の職員方一人一人が少しでもお役に立ちたいとの思いで、多くの方に賛同して頂きました。

大阪府協会の社会貢献活動

大阪府協会では、今年度募金を活用し、つなぎびと発行以外に、大阪府下の児童養護他 49 施設への支援や社会福祉協議会へ福祉車両の寄贈、盲導犬育成支援、日本赤十字大阪府支部・大阪府新型コロナウィルス助け合い基金を通じての医療従事者方への支援、大阪自殺防止センターや大阪国際ガン治療財団への寄付など幅広い支援を行っております。

とりわけ児童養護施設への支援は、大阪市子ども青少年局・大阪府社会福祉協議会を通じ、お金ではなく各施設が今必要とする物品を申し出頂き、協会で購入し、お届けしております。

子どもたちからのお礼のメッセージは、心に響くものも多く、私たちが勇気づけられております。そのほかにも保育士・介護福祉士奨学金制度（2020 年度は 18 名）や子育てと仕事両立支援助成金制度（保育園・学童保育所への支援・2020 年度は 15 施設）も実施し、子どもたちの成長をサポートする人材育成・助成、介護人材の育成に取り組んでおります。

いずれも 2021 年度継続して実施予定です。詳しくは大阪府協会（06-4708-5132）までお問い合わせ下さい。

子どもたちからのメッセージ

つなぎびとへの思い

【松井大阪市長、SSW 人材育成に大号令】（つなぎびと昨年号）を読んで、子ども教育現場と福祉現場との連携の重要性、それを担う職務の一つである SSW 養成の大切さを市長も認識されている事も知り、山野先生（大阪府立大学 SSW 評価支援研究所長）が学校と福祉をつなぐ様々な調査・研究・工夫をされ、SSW 養成に向けて取り組んでおられることが着実に広がっていると感じています。

子どもの貧困問題・児童虐待の問題など子どもを取り巻く環境はコロナ禍で厳しくなっていると思います。課題のある子どもたちをしっかりとスクリーニングし、手を差し伸べることのできる社会になるよう、これからも『子どもたちを元気にしたい。』そのような思いで、つなぎびと発行を通じ SSW 養成の大切さや、頑張っている方のメッセージが多くの人に届くよう、生命保険協会大阪府協会としても、引き続き応援させて頂きたいと考えております。

さいごに

生命保険は多くの人で支え合う商品で、【相互扶助の精神】で成り立っております。業界で仕事をするものとして、これからも多くの方々にご理解ご支援頂き、社会貢献活動を続けて参りたいと思います。今後とも宜しくお願い申し上げます。

あとがき　きょうの音づれ

凛としたまちだった。山口県萩市。初秋、山野則子さんの取材（6、7面）で訪れた。「松下村塾へ」と運転手さんに告げて、松陰神社につくと、タクシーを降りてガイドのように案内してくれた。

親 思う　こころにまさる　親 心　きょうの音づれ　なんときくらん

安政の大獄で刑死を覚悟した29歳の吉田松陰が、両親宛てに書いた「永訣（えいけつ）の書」に綴られた歌だ。

「音づれ」は、便り。「音信」と書く人も。『つなぎびと』に描いた山野さんたちの想いは、「永訣（別れ）」ではなく、未来に向けての「音づれ」。音信不通にならないように、編集できたか。　（篤）